

# 『四庫全書総目提要』 呂祖謙「呂氏家塾読詩記」 訳注

重野 宏一

## 凡 例

一、本稿は、文淵閣『四庫全書総目提要』巻十五、經部十五「詩類一」に収められている呂祖謙撰「呂氏家塾読詩記」の訳注である。

一、訳注の体裁は、「原文」「校勘」「訓読」「現代語訳」「注」から成る。本文は、筆者の判断で【一】と【二】に分け、章ごとに訳出した。

一、原注については「」で示した。また注において原文とともに割注を引用する際にも同様の方法を採った。

一、本文の底本には、阮元が杭州の文瀾閣に附された武英殿版『総目提要』に拠って刻した『欽定四庫全書総目』、いわゆる「浙江本」（『四庫全書総目』王伯祥断句、北京中華書局景印、一九六五年六月、第一版、一九八七年七月、第四次印刷）を用い、以下の三点の版本と校合を行った。

①「文淵閣四庫全書」著録本のはじめに附された提要、いわゆる「書前提要」（台湾商務印書館景印、一九八三年七月）。

②「文淵閣四庫全書」に附された武英殿刻本『欽定四庫全書総目』、いわゆる「殿版」（台湾商務印書館景印、一九八三年七月）。

③同治七年（一八六八）、浙江本を重刻した広東書局重刊本、いわゆる「粵刻本」（『欽定四庫全書総目』台北藝文印書館景印、一九六九年三月、第三版を使用。なお、原田種成氏編『訓点本四庫提要』經部二、書・詩類、汲古書院、一九八二年一月も同版）。

また、近年出版された『提要』の最も新しいテキストである、魏小虎氏編撰『四庫全書総目彙訂』（上海古籍出版社、二〇一二年十二月）も合わせて参照した。対校の結果、底本の文字を若干改めた箇所もある。それらについては校勘において記した。

一、原文にみられる俗字、異体字、闕筆などはすべて正字体に改め、それらについては校勘において特に注記していない。但し、別字の場合は、煩を避けず一々注記することとした。また避諱字は原文、訓読ではそのまま残し、現代語訳において正しく示

し、その旨を注で明記した。なお、擡頭、平出については、いずれも反映させていない。

一、注における引用書名、篇名などについては、基本的に初出の場合は正名を記し、再出以後は誤解のないと思われる範囲で適宜省略した。

一、本訳注の先行研究としては、すでに大野貴正氏が「四庫提要詩類選釋」⑧ 呂氏家塾讀詩記三十二卷「〔詩経研究〕第二十二号、一九九八年二月」としてまとめておられる。本稿を成すにあたり、先学の研究に多大なる恩恵を受けたことを感謝申し上げる。

# ①(一) 呂氏家塾讀詩記三十二卷〔浙江汪汝璦家藏本〕

【一】宋呂祖謙撰。祖謙有古周易、已著錄。此其說詩之作也。朱子與祖謙交最契、其初論詩亦最合。此書中所謂朱氏曰者、即所採朱子說也。後朱子改從鄭樵之論、自變前說、而祖謙仍堅守毛鄭。故祖謙沒後、朱子作是書序稱、少時淺陋之說、伯恭父誤有取焉。既久自知其說有所未安、或不免有所更定。伯恭父反不能不置疑於其間、熹竊惑之、方將相與反覆其說。以求真是之歸、而伯恭父已下

世云云。蓋雖應其弟祖約之請、而夙見深有所不平。然迄今兩說相持、嗜呂氏書者、終不絕也。

## 〔校勘〕

- ①書前提要是文頭に「〔臣〕等謹案」とあり、底本の記載が無い。
- ②書前提要是「書傳」に作る。
- ③殿版、粵刻本は「所」が無い。
- ④書前提要には「伯」の上に「則」がある。

## 〔訓読〕

宋の呂祖謙の撰。祖謙に古周易有り、已に著録す。此れ其の詩を説ける作なり。朱子祖謙と交はり最も契り、其の初め詩を論ずるも亦た最も合す。此の書中の謂ふ所の朱氏曰はくなる者は、即ち採る所の朱子の説なり。後に朱子改めて鄭樵の論に従ひ、自ら前説を變ふるも、而るに祖謙は仍ほ毛鄭を堅守す。故に祖謙の沒後、朱子は是の書の序を作りて称す、少時淺陋の說にして、伯恭父誤りて取る有り。既に久しうして自ら其の說に未だ安らかならざる所有りて、或いは更定する所有るを免れざるを知る。伯恭父反つて疑を其の間に置く能はず。熹竊かに之に惑ふ。方に將に相ひ

与に其の説を反覆し、以て真是の帰を求むるも、而るに伯恭父已に下世せり云云、と。蓋し其の弟祖約の請に応ずと雖も、夙に深く平らかならざる所有るを見る。然れども今に迄るまで両説相ひ持し、呂氏の書を嗜む者、終に絶へざるなり。

#### 〔現代語訳〕

宋の呂祖謙の撰。祖謙には『古周易』があり、これについてはすでに著録した。本書は祖謙が『詩』を解釈した著作である。朱子は祖謙と親密な交友関係にあり、当初は『詩』について議論するにも、やはりその解釈がよく合致していた。この書中で「朱子曰はく」というのは、すなわち朱子の詩説を採用したものである。のちに朱子は再び鄭樵の説に従って、自ら前説を変更するに至ったが、祖謙はなおも毛伝や鄭箋といった古注を墨守し続けたのである。それゆえに祖謙の没後、朱子は本書の序を作り、そこで次のように述べている。「ここに引かれたものは私の若かりし頃の浅学菲才の説であるが、伯恭父は誤ってこれを取り上げてしまった。しばらくして私は自らその説にまだ穏やかでないものがあり、さらに改訂を要するものがあることに気付いていた。伯恭父ならばその点に疑問を抱かないはずはない。私はひそかにこのことに

困惑している。いままさに互いにその学説を繰り返しやり取りし、そのうえで最も真実に近いものに帰結しようと考えていたが、伯恭父はすでにこの世を去ってしまった。云々」。この発言を鑑みるに、この序は祖謙の弟である呂祖約の要求に応じたものであるが、かなり以前より朱子が自説に対して深く不平を抱いていたことが見うけられる。しかしながら今に至るまで呂氏、朱子の両説はともに支持され、呂氏の書を愛好する者は、結局は絶えていない。

#### 〔注〕

(一) 呂氏家塾讀詩記 呂祖謙撰。三十二卷。朱熹の原序を附す。

『呂氏家塾讀詩記』の南宋刊本は以下の三系統に分類される。

① 淳熙江西漕台本

② 建寧本

③ 眉山賀春卿重刻本

①は淳熙九年（一一八二）に刊行されたもので、原本は北京図書館所蔵。『北京図書館古籍善本書目』（北京図書館編、書目文献出版社、一九八七年七月）「経部」に拠れば、三十二卷、二十冊、半葉九行、毎行十九字、小字双行、同白口、左右双辺、朱熹の序、尤袤の跋を附している。その影印は「四部叢刊続編」

経部（上海商務印書館景印、一九三四年一月）、および「中華再造善本叢書」唐宋編経部（北京図書館出版社景印、二〇〇三年六月）に収められている。またわが宮内庁書陵部にも南宋版を二部蔵し、いずれも「半葉十二行、毎行二十二字」であり、北京図書館所蔵の江西漕台本の版式とは異なる。むしろつぎにあげる「建寧本」に近いが、文字の異同等が江西漕台本と較べてもきわめて少ないため、この系統の覆刻本とみなされている。これについては、阿部隆一氏「日本国見在宋元版本志経部」（『阿部隆一遺稿集』第一卷「宋元版篇」慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編、汲古書院、一九九三年一月、所収）が字様・刻工などに詳しく考証されており、一つを南宋後期修建安本、いま一つを江西丘氏原刻本に基づく浙における翻版と断ぜられた。また後者の影印は「日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書」第壹輯（線装書局景印、二〇〇一年十二月）に収められている。

②は淳熙九年（一一八二）に書かれた尤表の跋に、「東州士子家寶其書、而編帙既多、傳寫易誤、建寧所刻益又脱遺。其友丘漕宗卿、惜其傳之未廣、始鋟木於江西漕臺。（東州の士子家其の書を宝とするも、而るに編帙既に多く、伝写誤り易く、建

寧の所刻は益ます又た脱遺あり。其の友丘漕宗卿、其の伝の未だ広まらざるを惜しみ、始めて木を江西漕台に鋟す）」とあることから、このとき淳熙江西漕台本に先立ってすでに刻本があったことがわかる。「建寧所刻」とは、すなわち建寧府（現在の福建省建甌市）にて出版された版本である。清の于敏中らによる『天祿琳琅書目』巻一には「東萊家塾讀詩記」と題して本書が著録されている。この版本は三十二卷、二函十六冊の巾箱本であり、もとは書画收藏家として知られる明の項元汴（一五二五―一五九〇、秀水橋李の人、字は子京、墨林山人、香崖居士、退密齋主人などと号す）の所蔵であつたことが記されている。また「卷約字工、猶屬閩中舊刻」とあることから、これが建寧本ではないかと推測されるのである。さらに『天祿琳琅書目後編』巻二には同じく二函十六冊の宋巾箱本を二部著録している。版式について、その一つは「每版十二行、毎行二十二字」といい、いま一つは「十四行十九字」、さらには「且注中引諸家姓氏皆用白文」とあり、それは明らかに江西漕台本の版式とは異なるものであるから、やはり建寧本の可能性が高いと考えられる。但し二書ともに尤表の跋を附すことから建寧本原本ではなく、その系統の覆刻本とするのが妥当であろう。また、北

京大学図書館にも莫友芝旧蔵の南宋版を一部蔵しており、それも半葉十四行、毎行十九字と、『天祿琳琅書目後編』にみえる十四行本と版式を同じくすることから建寧本ではないかと察せられる。

③は魏了翁の後序を附す。『提要』の後文にも若干これについて触れられているが、その実物はおろか、確かな記録さえも伝えられていないため末詳である。

なお詳細は省くが、本書は明代以降にも多くの刊本が出版され、そのいくつかは、清の張海鵬の「墨海金壺」や錢儀吉の「経苑」、胡丹鳳の「金華叢書」などの叢書に収められている。それらは以下に述べる陸鈇りくよくの序のごとく、重刊された際にはその校刊者の序文もあわせて附されたりもしている。また、わが元祿九年（一六九六）には、明の史樹徳ら校刊による万曆四十一年（一六一三）刊本の和刻本が出版されており、これは宝永元年（一七〇四）にも重刻されている。これはいずれも三十二巻十冊である。

宮内庁書陵部蔵の南宋版については、黄華珍氏「宮内庁書陵部所蔵宋元版の一考察」（『岐阜聖徳学園大学紀要』）（外国語学部編）第四十四集、二〇〇五年二月）に詳細な解題が備わり、こ

れら三系統についても細かく言及されている。

（二）**浙江汪汝璫家蔵本** 「四庫全書」で用いられたテキストには、おおむね以下の六種がある。

・勅撰本（清初より乾隆時までの間に勅令によって編纂されたもの）

・内府蔵本（武英殿など宮中に所蔵され、御覽に供するためもの）

・永樂大典本（明代の類書『永樂大典』中より散佚書を拾い集めたもの）

・各省採進本（各地の巡撫が民間より徵発もしくは購入したもの）

・家蔵本（蔵書家より借用の形で提供させたもの）

・通行本（巷間に流布するごくありふれたもの）

「汪汝璫」（生卒年未詳）、字は坤伯、滌原と号す。清、錢塘（現在の浙江省杭州市）の人。清代の著名な蔵書家である汪憲（康熙六十年（一七二一）～乾隆三十六年（一七七二）、字は千陂、漁亭と号す。乾隆十年の進士。刑部主事、陝西員外郎などを歴任）の長子。その死後、振綺堂書楼を継承した。ここにはおよそ六百種もの善本が収められており、「四庫全書」編纂にあ

たり、汪汝璣は所蔵の典籍二百十九種を進呈し、のちさらに百種を献上した。そのうち実際に「四庫全書」に著録されたのは、百五十一種、存目百二十二種、計千八百九十四巻であった。なお、「四庫全書」に収められた家蔵本については、鄭偉章氏『書林叢考』（増補本、岳麓書社、二〇〇八年七月）に詳述されている。

(三) 呂祖謙 南宋、高宗、紹興七年（一一三七）～孝宗、淳熙八年（一一八一）。字は伯恭、号は東萊、そのため東萊先生と称せらる。諡は成公。金華県婺州（現在の浙江省金華市）の人。父は呂大器、弟は呂祖僉。学者の家系に生まれ、隆興年間（一一六三～六四）に進士となり、同時に博学宏詞科に及第し、太学博士、直秘閣著作郎、国史院編修官などを歴任した。文章に長じ、学風は古義を宗とし、とりわけ『毛詩』と『春秋』をもつて知られ、また十七史によく通じていた。そのため、朱熹、張栻らと並び東南三賢と称せられた。また交友は広く、朱熹と学説が対立した陸九齡、陸九淵兄弟と議論を戦わせた、いわゆる「鵝湖の会」の仲介も行った。著作としては、本稿で取りあげる『呂氏家塾読詩記』三十二巻のほか、『古周易』一卷、『東萊左氏博議』二十五巻、『呂東萊先生文集』四十巻、『宋文鑑』（編

著）百五十巻など多数あり、朱熹との共編による『近思録』十四巻はよく知られている。これらはいずれも、近年、浙江古籍出版社から刊行された『呂祖謙全集』全十六冊（黄靈庚、呉戦聖主編、二〇〇八年一月）に収められ、容易にみることができるようになった。伝は『宋史』巻四百三十四「儒林四」、及び『宋元学案』巻五十一「東萊学案」に立てられている。また伝記研究としては、潘富恩・徐余慶氏『呂祖謙評伝』（中国思想家評伝叢書、南京大学出版社、一九九二年一月）、杜海軍氏『呂祖謙年譜』（年譜叢刊、中華書局、二〇〇七年八月）があり、朱熹との関係については、市來津由彦氏『朱熹門人集団形成の研究』（東洋学叢書、創文社、二〇〇二年三月）に詳しい。

(四) 古周易 一卷（十二編）。呂祖謙の自序、朱熹の跋を附す。その跋文に、「淳熙九年（一一八二）夏六月庚子朔旦」とあることから成書の年代が知られる。「古易」とは、古文易のことであり、今文（漢代に通行した隸書で書かれたもの）による『周易』ではなく、それとは異なる篆書系統の古字で書かれたものである。その編次については今文・古文ともに大差なく、いずれも上経・下経、および伝にあたる「十翼」（彖伝上・下、象伝上・下、「繫辞伝上・下、文言伝、説卦伝、序卦伝、雜卦伝）の全十

二編から成る。それはたとえば『漢書』藝文志に、「易經十二篇、施孟梁丘三家」と今文易を著録するが、そこに顔師古が「上下經及十翼。故十二篇」と注することからもわかる。また古文易は、京房（前七七〜前三七、字は君明）によつて大成された占候易（今文）に対し、象数易を基本とした。のちに古文易は民間において前漢の費直（生卒年未詳、字は長翁、東萊の人、『漢書』儒林伝にみえる）によつて特に広められた。その系統は「費氏易」などと称せられ、後漢の馬融（七九〜一六六、字は季長）、その弟子の鄭玄（一二七〜二〇〇、字は康成）、さらには荀爽（一二八〜一九〇、字は慈明）らによつて主流をなし、魏の王弼（二二六〜二四九、字は輔嗣）がこれを大成した。さらに孔穎達（五七四〜六四八、字は仲達）が「正義」に王弼注を採用したことによつてその地位は不動のものとなるが、多くの学者の手を経たがゆえに、本来の古文易の姿は失われてしまった。その後、北宋に至つてこれを復元・校訂する試みがなされた。呂大防（一〇二七〜一〇九七、字は微仲）の『周易古経』二巻がその先蹤であり、これを受けて、晁説之（一〇五九〜一一二九、字は以道）の『古周易』八巻、薛季宣（一一三四〜一一七三、字は士龍）の『古文周易』十二巻、程迥（生卒年未詳、字は可久）の

『古周易考』一巻、李燾（一一一五〜一一八四、字は仁甫）の『周易古経』八篇、呉仁傑（生卒年未詳、字は斗南）の『古周易』十二巻などが著された。本書もその學術の流れのなかで生まれたものである。また朱熹が『周易本義』十二巻を編纂するにあたつて本書を底本としたことでも知られる。『直齋書録解題』巻一「易類」、『宋史』巻二百二、藝文一「易」、『経義考』巻三十「易二十九」に著録し、それぞれ書名を「古易」とする（但し、『書録解題』は「古易十二巻音訓二巻」とする）。また『提要』巻三、経部三「易類三」にも著録する。

（五）朱子 南宋、高宗、建炎四年（一一三〇）〜寧宗、慶元六年（一二〇〇）。名は熹、字は元晦、あるいは仲晦といい、号は晦庵、別に紫陽、考亭、新安などと号した。南劍尤溪（現在の福建省尤溪県）で生まれた。祖籍は徽州婺源県（現在の江西省婺源県）であり、徽州は新安郡の別名があることから新安の人と名乗った。父は朱松（一〇九七〜一一四三、字は喬年）。紹興十八年（一一四八）、十九歳のとき進士に及第して同安県の主簿となつたが、在任四年にして官を退き、郷里に帰つて学問にとめた。のちに程顥、程頤の学統を引く李侗（一〇九三〜一一六三、字は愿中、延平と号す）に道学を学び、その後継者に指

名されるほどになった。淳熙六年（一一七九）、南康軍知事となり、廬山の白鹿洞書院を復興させ、自ら教鞭を執って講学を行った。淳熙八年には浙東提挙となり、官僚に対する度重なる弾劾を行った。後年寧宗が即位したとき、宰相の趙汝愚煥の登用によって、章閣待制、兼侍講として中央に召された。しかし、政権を握った韓侂胄<sup>かんくわうちゆう</sup>は、趙汝愚煥、朱熹をはじめ五十九人を偽党とし、理学を偽学として徹底的に弾圧した（慶元の党禍）。そのため朱熹は出仕後わずか四十日あまりで罷免され、失意のうちに生涯を終えた。しかし、韓侂胄の死後、文公と諡され、淳祐元年（一二四一）、孔子廟に従祀されるに至った。生涯の多くを著述と講学に尽くし、周敦頤、二程子ら宋の理学を集成した。著に『周易本義』十二卷、『詩集伝』二十卷、『四書章句集注』二十六卷、『儀礼経伝通解』三十七卷、『資治通鑑綱目』五十九卷、『楚辞集注』八卷、『晦庵先生朱文公文集』百卷、門人との座談をまとめた『朱子語類』百四十巻など多数ある。伝は『宋史』卷四百二十九「道学三」、および『宋元学案』卷四十八、四十九「晦翁学案上・下」に立てられている。

以下、近年刊行された朱熹の詩経学についてのまとまった研究を挙げておく。

- ・黄忠慎氏『朱子《詩経》学新探』（五南圖書出版公司、二〇〇二年一月）
- ・檀作文氏『朱熹詩経学研究』（学苑出版社、二〇〇三八月年）
- ・鄒其昌氏『朱熹詩経詮釈学美学研究』（北京商務印書館、二〇〇四年七月）
- ・王倩氏『朱熹詩教思想研究』（北京大学出版社、二〇〇九年十一月）
- ・陳鴻儒氏『朱熹《詩》韻研究』（社会科学文献出版社、二〇一二年三月）
- ・吳洋氏『朱熹《詩経》学思想探源及研究』（国学研究文庫、社会科学文献出版社、二〇一四年五月）
- （六）後朱子改從鄭樵之論、自變前說 「鄭樵」（北宋、徽宗、崇寧三年（一一〇四）～南宋、高宗、紹興三十二年（一一六二））は南宋の儒学者、史学者。字は漁仲、溪西逸民、夾漈先生と号す。莆田県（現在の福建省莆田市）の人。枢密院編修官となり、勅命によって『通志』二百巻を著した。伝は『宋史』卷四百三十六「儒林六」に立てられている。著作は多数あるが、『通志』のほか現存しているものは、『夾漈遺稿』三巻、『爾雅注』三



卷、『六經輿論』六卷（偽書説あり）、『詩』の注釈である『詩辨妄』一卷（原六卷、顧頤剛輯佚、辨偽叢刊所収、樸社、一九三三年七月）を数えるのみである。詩経解釈史においては、特に詩序批判を展開したことで知られる。伝記およびその著述については、

・顧頤剛「鄭樵伝」『国学季刊』一卷—一号、国立北京大学、一九三三年一月）

・同「鄭樵著述稿」『国学季刊』一卷—二号、国立北京大学、一九三三年二月）

の研究があり、特に近年においては、

・呉懷祺氏『鄭樵研究』（厦門大学国学研究院資助出版叢書、厦門大学出版部、二〇一〇年十一月）

が最も詳しい。また経解に關しての専論には、

・江口尚純氏「鄭樵の詩経学（一）——その学説と立場——」

『詩経研究』第十一号、一九八六年十二月）

・同氏「鄭樵の經書觀——特にその詩経学・春秋学をめぐつて」

（『日本中国学会報』第四十四号、一九九二年十月）

がある。

なお後年の朱熹が鄭樵の詩説、とりわけその詩序批判に強く

影響を受けたことについては、『朱子語類』卷八十、詩一「綱領」において自ら「詩序實不足信。向見鄭漁仲有詩辨妄、力詆詩序、其間言語太甚、以爲皆是村野妄人所作。始亦疑之。後來子細看一兩篇、因質之史記國語、然後知詩序之果不足信。（詩序は實に信ずるに足らず。向に鄭漁仲に詩辨妄有り、力めて詩序を詆り、其の間の言語太甚だしく、以て皆な是れ村野妄人の作りし所と爲すを見る。始め亦た之を疑ふ。後來に子細に一兩篇を看、因りて之を史記・國語に質し、然る後に詩序の果たして信ずるに足らざるを知れり）」と述べている。また、南宋、黃震『黃氏日鈔』卷四「読毛詩」に、「雪山王公質、夾漈鄭公樵、始皆去序而言詩。與諸家之説不同。晦庵先生、因鄭公之説、盡去美刺、探求古始。其説頗驚俗、雖東萊不能無疑焉。（雪山の王公質、夾漈の鄭公樵、始めて皆な序を去りて詩を言ふ。諸家の説と同じからず。晦庵先生、鄭公の説に因り、尽く美刺を去り、古始を探究す。其の説頗る俗を驚かし、東萊と雖も疑ひ無き能はず）」とあり、王応麟の『困学紀聞』卷三「詩」にも、「朱子詩序辨説、多取鄭漁仲詩辨妄。（朱子の詩序辨説は、多く鄭漁仲の詩辨妄に取る）」との指摘がすでにみえている。

（七）朱子作是書序稱……而伯恭父已下世云云 『呂氏家塾讀詩

記』における朱熹の序（『文集』卷七十六では「呂氏家塾讀詩記後序」とする）に、「雖然、此書所謂朱氏者、實熹少時淺陋之說、而伯恭父誤有取焉。其後歷時既久自知其說有所未安。如雅鄭邪正之云者、或不免有所更定、則伯恭父反不能不置疑於其間。熹竊惑之。方將相與反復其說、以求真是之歸、而伯恭父已下世矣。嗚呼伯恭父已矣。（然りと雖も、此の書の所謂る朱氏なる者は、実に熹の少時淺陋の說にして、伯恭父誤つて取る有り。其の後時を歷ること既に久しうして自ら其の說に未だ安らかならざる所有を知る。雅鄭邪正の云ひの如きは、或いは更定する所有るを免れず、則ち伯恭父反つて疑を其の間に置かざること能はず。熹竊かに之に惑ふ。方に將に相ひ与に其の說を反復し、以て真是の帰を求めんとするも、伯恭父已に下世せり。嗚呼伯恭父已んぬ）」とある。

（八）其弟祖約之請 「祖約」は、呂祖儉（南宋、？～寧宗、慶元四年（一一九八）を指す。字は子約、晩年の号は大愚。『提要』が「祖約」というのは誤りである。金華の人。著に『大愚集』などがある。伝は『宋史』卷四百五十五「忠義十」、および『宋元学案』卷五十一「東萊学案」に立てられている。また朱熹との関係については、市來氏前掲書に詳しい。

なお、呂子約が朱熹に『讀詩記』の序文を依頼したことは、その序に、「伯恭父之弟子約、既以是書授其兄之友邱侯宗卿。而宗卿將爲版本以傳永久、且以書屬熹序之。熹不得辭也。乃畧爲之說、因并附其所疑者。以與四方同志之士共之、而又以識予之悲恨云爾。淳熙壬寅九月己卯、新安朱熹叙。（伯恭父の弟子約、既に是の書を以て其の兄の友邱侯宗卿に授く。而して宗卿將に版本を爲りて以て永久に伝へんとし、且つ書を以て熹に属して之に序せしむ。熹辭するを得ざるなり。乃ち略ぼ之が說を爲し、因つて并せて其の疑しき所の者に附す。以て四方の同志の士と之を共にして、又た以て予が悲恨を識すと爾か云ふ。淳熙壬寅九月己卯、新安朱熹叙）」とみえる。

【二】陳振孫書錄解題稱、自篤公劉以下、編纂已備、而條例未竟。學者惜之。此本爲陸鈇所重刊。鈇序稱、得宋本於友人豐存叔。呂氏書凡二十二卷、公劉以後、其門人續成之。與陳氏所說小異、亦不言門人爲誰。然書錄解題及宋史藝文志、均著錄三十二卷、則當時之本已如此。鈇所云云、或因戴溪有續讀詩記三卷、遂誤以後十卷當之歟。陳振孫稱、其博採諸家、存其名氏、先列訓詁、後陳文

義。剪截貫穿、如出一手。有所發明、則別出之。詩學之詳正、未有逾於此書者。魏了翁作後序、則稱其能發明詩人躬自厚而薄責於人之旨。二人各舉一義、已略盡是書所長矣。了翁後序、乃爲眉山賀春卿重刻是書而作。時去祖謙沒未遠、而版已再新、知宋人絕重是書也。

#### 〔校勘〕

- ① 書前提要是「刻」に作る。
- ② 書前提要にこの字無し。
- ③ 書前提要是「存」に作る。
- ④ 殿版は「悞」に作る。
- ⑤ 書前提要には以下の文を欠き、「乾隆四十六年十月恭校上」と結ぶ。
- ⑥ 殿版は「采」に作る。
- ⑦ 殿版は「裁」に作る。
- ⑧ 殿版は「板」に作る。

#### 〔訓読〕

陳振孫の書録解題に称す、篤きかな公劉自り以下、編纂已に備

はれども、條例未だ竟はらず。學者之を惜む、と。此の本は陸鈇の重刊する所と爲る。鈇の序に称す、宋本を友人豊存叔に得たり。呂氏の書凡て二十二卷、公劉以後は、其の門人之を続成す、と。陳氏の説く所と小しく異なり、亦た門人の誰れ爲るかを言はず。然れども書録解題及び宋史藝文志に、均しく三十二卷と著録すれば、則ち當時の本已に此くの如きか。鈇の云云する所は、或いは戴溪に続読詩記三卷有るに因りて、遂に誤りて後の十卷を以て之に当てたるか。陳振孫称すらく、其の博く諸家を採りて、其の名氏を存し、先に訓詁を列し、後に文義を陳ぬ。剪截貫穿、一手より出づるが如し。發明する所有れば、則ち別に之を出だす。詩学の詳正、未だ此の書に逾ゆる者有らず、と。魏了翁後序を作りては、則ち其の能く詩人の躬自ら厚くして薄く人を責むる旨を發明すと称す。二人各おの一義を挙ぐるも、已に略ぼ是の書の長ずる所を尽くせり。了翁の後序は、乃ち眉山の賀春卿是の書を重刻したるが爲にして作る。時に祖謙の没を去ること未だ遠からざるも、而るに版已に再新したれば、宋人の絶だ是の書を重んぜるを知るなり。

#### 〔現代語訳〕

陳振孫の『書録解題』には、『詩』の大雅の「篤きかな公劉」より以下は、編纂が十分に備わっていたが、條例についてはいまだその整備が終えられていない。学者はこのことを惜しんだ」という。この本は陸鈇が重刊したものである。その鈇の序には、「宋本を友人の豊存叔から手に入れた。呂氏の書は全三十二巻であり、大雅の「公劉」以後は、彼の門人が引き継いで成し遂げたものである」という。これは陳氏の説と少しく異なっており、またその門人がいったい誰であるかを述べていない。しかしながら『書録解題』及び『宋史』藝文志が、ともに三十二巻と著録していることからすれば、当時の原本はやはりこのようであったと考えるのが道理であろう。陸鈇が述べていることは、あるいは戴溪に『続読詩記』三巻があることによつて、かくて誤つて後の十巻をこれに当てしまったものであろうか。本書の性格について、陳振孫は『読詩記』はひろく諸家の注釈を取りあげ、その名氏を記載し、まず訓詁を並べ、その後で文義を述べている。その文章は多くの注釈を折衷していながらも余計な言葉を削ぎ落として意義が一貫しており、それはたしかに一人の手から出たもののようである。さらに自ら説を明らかにするものがあれば、諸家とは別にこれを提出している。『詩』学のなかでもこれほど詳細に考究している点

については、いまだこの書を越えるものはない」と述べている。また、魏了翁は『読詩記』の後序を作り、そこで「呂祖謙は詩人がみずから責めることを厚くして、人を責めることを薄くしている旨を『読詩記』において明らかにした」という。両者はそれぞれ本書の一義を挙げたものであるが、十分にこの書の長所を言い尽くしているといえる。了翁の後序は、眉山の賀春卿が本書を重刻したときに作られたものである。その時にはまだ祖謙がこの世を去つてから久しくないころであつた。しかしその版が再び新たになされていることからみても、宋代の人々がきわめて本書を重んじていたことが窺えるのである。

〔注〕

(一) 陳振孫書録解題……學者惜之 陳振孫『直齋書録解題』卷二「詩類」に、「然自公劉以後、編纂已備、而條例未竟。學者惜之」とみえ、「以下」を「以後」に作り、また「篤」字が無い。『読詩記』の編纂については、同書、卷二十六、大雅、生民之什「公劉」第一章注の末尾に、「先兄己亥之秋、復脩是書、至此而終。自公劉之次章訖於終篇、則往歲所纂輯者。皆未及刊定。如小序之有所去取、諸家之未次先後。與今編條例多未合。今不

敢復有所損益。姑從其舊、以補是書之闕云。(先兄己亥の秋、復た是の書を修するも、此に至つて終へり。公劉の次章自り終篇に訖るまでは、則ち往歳纂輯する所の者なり。皆な未だ刊定に及ばず。小序の去取する所有るが如きは、諸家の未だ先後を次せず。今編と條例多く未だ合はず。今敢へて復た損益する所有らず。姑らく其の旧に従ひて、以て是の書の闕を補ふと云ふ)と記されている。ここでは呂祖謙を「先兄」と称していることから、恐らくは呂子約の記載かと思われる。また呂祖謙が「庚子辛丑日記」(『東萊集』卷十五、「淳熙八年」七月丙申大)の条)において、「二十七日、公劉一章、陰」とあるのを最後に筆を擱いており、これは『読詩記』の記載と一致する。

(二) 陸鈞 明、孝宗、弘治十年(一四九四)〜?。明の政治家。字は莘之、少石子と号す。浙江省寧波府鄞県(現在の浙江省寧波市)の人。陸銓(?〜一五三五頃)の弟。正徳十六年(一五二二)、進士に及第し、翰林編修を授かる。のち湖広按察検事、江西参議、山東按察副使などを歴任したが、山東に通志が無いことを嘆き、『山東通志』四十巻の編輯に着手した。成書後、老いを理由に上疏し、桂冠して故郷に帰ったという。著に『少石集』十三巻、『賢識録』一卷などがある。伝は『鄞県志』巻十五

「人物」に立てられており、『明史』巻二百八十七、文苑三「王慎中伝」にも陸銓とともにわずかに経歴が附載されている。

(三) 鈞序稱……其門人續成之 『読詩記』の陸鈞の序に、「余嘗讀呂氏讀書記大事記、未睹讀詩記也。近得宋本於友人豐存叔、讀而愛之。其書宗孔氏以立訓、考註疏以纂言。剪綴諸家、如出一手。……呂氏凡二十二巻、乃公劉以後、編纂未就。其門人續成之。茲又斯文之遺憾云。(余嘗て呂氏の読書記・大事記を読むも、未だ読詩記を睹ざるなり。近ごろ宋本を友人豊存叔に得て、読みて之を愛す。其の書孔氏を宗として以て訓を立て、註疏を考へて以て言を纂む。諸家を剪綴して、一手に出づるが如し。……呂氏凡べて二十二巻、乃ち公劉以後、編纂未だ就らず。其の門人續ぎて之を成す。茲れ又た斯文の遺憾なりと云ふ)」とある。

「豊存叔」は、豊坊(明、孝宗、弘治五年(一四九二)〜世宗、嘉靖四十三年?(一五六三))のこと。明代の書家、篆刻家。字は存礼、存叔、人翁、号は南禺外史、晩年には名を道生とあらためた。陸鈞と同じく浙江省寧波府鄞県の人。豊氏は北宋の宰相であつた豊稷を祖とする寧波の名家であつたが、この豊坊の代に至つて没落した。嘉靖二年、進士に及第し、南京吏部考

功主事、礼部主事などを歴任した。書画を能くし、また博覧強記で知られ、とりわけ経書に造詣が深かったが、祖先の名に假託した偽経を大量に作成したことによりその名を貶めた。晩年には名声も失墜して貧困に窮し、最後は蘇州で野垂れ死にした。豊坊は蔵書家としても知られ、北宋以来より続く家蔵書は「万卷楼」に収められたが、嘉靖四十一年（一五六二）、火災に遭いその多くは灰燼に帰した。その一部は天一閣に流れたといわれる。著には『書訣』などがある。伝は『明史』卷一百九十一に、父豊熙の伝に附載されている。また、豊稷以降、豊坊に至る十五代の系譜は、清の全祖望（謝山）「天一閣蔵書記」に詳しく記載されている。豊坊については、平岡武夫氏「古書の幻想と文字の魅惑 豊坊の古書世学」（『経書の伝統』岩波書店、一九五一年一月、所収）を参看。

（四）書録解題及宋史藝文志 『書録解題』に、「呂氏家塾讀詩記三十二卷」、および『宋史』卷二百二、藝文志、藝文一「詩類」に、「呂祖謙家塾讀詩記三十二卷」と著録する。

（五）戴溪有續讀詩記三卷 「戴溪」（南宋、高宗、紹興十一年（一一四一）～寧宗、嘉定八年（一二二五））は、南宋の儒学者。字を肖望といい、岷隱と号したことにより、人々は岷隱先生と称

した。永嘉（現在の浙江省温州市）の人。淳熙五年に進士に及第し、工部尚書、文華閣学士を歴任した。死後、端明殿学士を追贈され、理宗の紹定年間には文端と諡された。著作には『続呂氏家塾讀詩記』三卷のほか、『易総説』二卷、『曲礼口義』二卷、『春秋講義』四卷、『石鼓（論語）答問』三卷、『石鼓孟子答問』三卷、『歷代将鑑博議』十卷（以上『宋志』に拠る）、『清源志』七卷（『書録解題』に拠る）など多数ある。伝は『宋史』卷四百三十四「儒林四」に立てられている。

『続呂氏家塾讀詩記』三卷は、『提要』（卷十五、經部「詩類」）に、「溪以呂氏家塾讀詩記取毛傳爲宗、折衷衆說、於名物訓詁、最爲詳悉、而篇内微旨、詞外寄託、或有未貫、乃作此書以補之。故以續記爲名。（溪 呂氏家塾讀詩記 毛伝を取りて宗と爲し、衆說を折衷し、名物訓詁に於いて、最も詳悉と爲すも、而るに篇内の微旨、詞外の寄託、或いは未だ貫徹かざる有るを以て、乃ち此の書を作りて以て之を補ふ。故に續記を以て名と爲す）」というごとく、呂祖謙の著作を補足したものであるが、続けて「實則自述己意、非盡墨守祖謙之說也。其中如謂標梅爲父母之擇壻、有狐爲國人之憫鰥、甘棠非受民訟、行露非爲侵陵。（実は則ち自ら己が意を述べ、尽くは祖謙の説を墨守するに非ざるなり。其

の中標梅を父母の墳を挾ぶと為し、有狐を国人の鰥を憫むと為し、甘棠は民の訟を受くるに非ず、行露は侵陵せらるるに非ずと謂ふが如し」と指摘するように、必ずしも呂祖謙の説を受けていないという。

(六) 陳振孫稱……正未有逾於此書者 『書錄解題』に、「博采諸家、存其名氏、先列訓詁、後陳文義。剪裁貫穿、如出一手。己意有所發明、則別出之。詩學之詳正、未有逾於此書者也。」(博く諸家を採り、其の名氏を存し、先づ訓詁を列し、後に文義を陳ぬ。剪裁貫穿、一手を出づるが如し。己が意に發明する所有らば、則ち別に之を出だす。詩學の詳正、未だ此の書に逾ゆる者有らざるなり)」とみえるが、やや文字に異同がある。

「剪裁」は、無駄な文句や表現を削ること。『文心雕龍』鎔裁第三十二に、「規範本體謂之鎔、剪裁浮詞謂之裁。(本體を規範するを之れ鎔と謂ひ、浮詞を剪裁するを之れ裁と謂ふ)」とある。「貫穿」は、その意味が一貫していること。したがって、ここでは諸家の注釈を折衷しながらも、余分な表現や語句は削ぎ落とされ、まるで一人の手から成ったように意味が一貫していることをいう。「詳正」は、詳細に考察すること。『毛詩正義』序に、「覆更詳正、凡爲四十卷。(覆更詳正し、凡て四十卷と為

す)」とある。

(七) 魏了翁作後序……而薄責於人之旨 「魏了翁」(南宋、孝宗、淳熙五年(一一七八)〜理宗、嘉熙元年(一二三七))は、南宋末の理學者。字は華父、鶴山と号す。諡は文靖。蜀の邛州蒲江(現在の四川省蒲江県)の人。慶元五年(一一九九)の進士。官は端明殿學士に至る。死後、太師を追贈された。朱熹に私淑し、その門人である黃子毅が編纂した『朱子語類』に序文を附し、さらには同じく門人である李方子が編纂した『朱子年譜』にも序文を附した。このことから朱子學盛行に大きく寄与したといわれる。著には『鶴山大全文集』百二十卷のほか、經書の注釈としては、『周易集義』六十四卷、『周易要義』十卷、『尚書要義』二十卷、『毛詩要義』二十卷、『儀禮要義』五十卷、『禮記要義』三十三卷、『周禮要義』三十卷、『春秋左伝要義』三十一卷、『論語要義』十卷(以上『宋志』に拠る)があり、『提要』の「尚書要義」(卷十一、經部十一「書類一」)に拠れば、あわせて九經あり、それらは『九經要義』二百六十三卷としてまとめられているという。伝は『宋史』卷四百三十七「儒林七」、および『宋元学案』卷八十「鶴山学案」に立てられている。なお、『毛詩要義』については、尾崎雄二郎氏に「毛詩要義と著者魏

了翁」(『ビブリア 天理図書館報』第二十三号、一九六二年十月)と題する論考がある。

この序は、『鶴山集』巻五十一「呂氏読詩記後序」に、「余昔東游、聞諸友朋曰、東萊呂公、嘗讀書、至躬自厚而薄責於人。若凝然以思、由是雖於僮僕閒、亦未嘗有厲聲疾呼。(余昔東游し、諸友朋に聞きて曰はく、東萊の呂公、嘗て書を読み、躬自ら厚くして薄く人を責むるに至る。若し凝然として以て思はば、是れ由り僮僕の間と雖も、亦た未だ嘗て厲声疾呼する有らず)」とみえる。「躬自厚而薄責於人」は、『論語』衛霊公篇の「躬自厚而薄責於人、則遠怨矣。(躬自ら厚くして薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる)」とあるのに基づく。

(八) 眉山賀春卿 経歴未詳。魏了翁の「呂氏読詩記後序」に、「因眉山賀春卿欲刊此書、以廣其傳、而屬余叙之。姑以所聞見識諸末。(因つて眉山の賀春卿此の書を刊して、以て其の伝を広めんと欲し、而して余に属して之に叙せしむ。姑らく聞見する所を以て諸末に識す)」とその名がみえる。

(筑波大学大学院人文社会科学科博士課程)